

## 著者 會 員 工 學 士 岩 崎 富 久

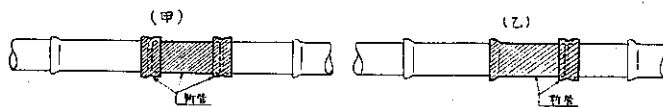
“水道鐵管破裂の復舊作業と所要時間に就て”の内容中 5. 鐵管工事施工法に關し種々御教示を得たことを感謝致します。

直管の破裂には縦ビリのことが多く斯かる場合には肉眼で見得る以上約 30 cm を切捨てる必要が起り自然殘存管の長が 1 m 未滿となるので管 1 本を取替へることが多いので茲に本文は破管の程度が直管 1 本を取替へる必要を生じたる場合のみを説述したのです。此の場合利益と思ふことは接合口數を減じ後に起り得る漏水量を出来るだけ少なくすることも考へられますから、殘存管の長さが約 1 m 未滿の場合はこゝでは將來の維持のことも考へて新管と取替へ接輪は 1 個使用を原則として復舊して居ます。鑿裂の程度により殘存管が 1 m 以上の時は必ずしも直管 1 本を取替へないで其儘再使用しますが、其の場合(甲)の如く兩挿切管(坊主管)と接輪 2 個を使用しても良いが普通は(乙)の如く受口切管と接輪 1 個とによつて復舊して居ます。

(甲)によると口數が 4 口となりますが(乙)ではそれが 3 口で済みます(第 5 圖參照)。本文に擧げた日本橋區通 2 丁目 2 番地に於ける破裂復舊實例では破裂程度が僅少でしたから復舊長 1.8 m 受口切管及び接輪 1 個を使用して(乙)で復舊しました。

この場合の復舊(第 5 圖記載程度の復舊)所要時間の遲速に就ては掘鑿面積其の他は同様としても接合一口少なき點よりしても幾分時間を縮め且つ將來の維持や經濟的方面より考へても乙が甲より若干優つて居ると考へて居ます。

第 5 圖



鐵管切斷に關しては大體同感です、本文記述の復舊作業の如きは何れは舊式な仕事になることと思ひますが少くも現在各市のこの種の仕事に對する操典の如きものを集めることも吾々に取つては無意味のことでは無いと考へて居ります。

次に配水池容量に就て破裂鐵管の復舊所要時間をば配水池の容量決定の際の factor とすべしと云つたのに對し植村氏は之を“破裂鐵管復舊時間中瀧池より出たる淨水の溜場なる配水池を大にして徒に放流させない様にする”意味に御解釋の様ですが、私が考へたのは復舊時間を考へて幾分か餘計の配水池容量と給水上の不安を少くしたいと云ふ意味です。配水池以下では管が分岐して居る處も多く植村氏の指示せられた如き副管施設が必要な處です。

本文に記したのは配水池丈が市内にある場合ですが、譬へ市内に淨水場があるにしても其處へ來る迄の鐵管に就て破壊の危險が考へられるならば矢張復舊所要時間を入れて各池の容量を設計すべきものと思ひます。

市内に水源まで全部がある時にも取水唧筒等に豫備を考へると同様のことを申述べたのに過ぎないのですが前回書方が充分で無かつたのでした。